

共通語とナショナル・アイデンティティ —シンガポールの言語政策を巡る考察—

山田 洋
日本大学大学院総合社会情報研究科

Common Language and National Identity —A Study on the Language Policy in Singapore—

YAMADA Hiroshi
Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

Singapore advocates a unique bilingualism which encourages people to learn English and “a mother tongue.” There has been an emphasis on English because it is regarded as a language for science, technology, international commerce, and industry. On the other hand, “a mother tongue” could be Chinese [Mandarin], Malay or Tamil, and it has been valued because of its cultural importance in helping people maintain their own tradition and ethnic identity. However, is it possible to make such a distinction among languages? Can languages be regarded statically in terms of function? In this thesis, I would like to examine major language policies in Singapore historically and to show that English, especially their Pidgin English, “Singlish” has also become a cultural language through which people can identify themselves as “Singaporean.”

Key words: bilingualism, common language, “mother tongue,” “Singlish,” and national identity.

1.はじめに

本論文は、複合社会であるシンガポールにおける言語、特に共通語とナショナル・アイデンティティとの関わりについて考察を試みるものである。

同国では公用語として4言語が用いられており、そのうち英語が共通語として、また事実上の国語として機能している。複合社会である東南アジア諸国では国家統合の求心力をなすべき国語をめぐる言語政策が重要な問題である旨の指摘があり（太田 1998 4）、シンガポールの共通語である英語を巡る考察には少なからず意義があるものと考えられる。

後述するとおり、同国では英語以外の公用語が各種族の「母語」として文化的言語と位置付けられているのに対し、英語は実用的言語とされ文化的言語の役割は担わされていない。しかし、同国における英語を巡る実情を考えれば、実用的言語としてのみこれを規定することは妥当でないようと思われる。例えば、2000年以降行われている英語改善運動¹は、

標準英語と異なるシンガポール固有の英語“Singlish”が国民に浸透していることを示している。固有の言語として共有する言葉で、人々は「シンガポール人」意識を確認することができるだろう。したがって、同国での英語、とりわけ“Singlish”はナショナル・アイデンティティに関わるものであり、その意味で文化的言語の性格をあわせ持つものではないかと考えられる。また、そうであれば、静態的・固定的に言語の機能を捉えるアプローチに議論の余地があるのではないかと考えられる。

このような仮説について、具体的な言語政策等を通して検証することを試みたい。考察の手順として、まずシンガポールの言語政策を概観し、特に共通語を巡る取り組みについて論じたい。そして、同国における英語のあり方に関して、特にシンガポール型ピジン英語のあり方やこれを巡る議論について考察したい。さらに、静態的・固定的な言語観を巡って私見を提示することを試みたい。

2.シンガポールの言語政策

シンガポールでは、「結合力のある複合種族社会を構築すること」²を目的として、2言語主義が言語政策の基本とされている。英語、華語、マレー語、タミール語の4言語が公用語で、そのうちマレー語は後述するとおり歴史的経緯から国語とされている。既述のとおり、英語以外の公用語は華人、マレー系、インド系の各種族集団の「母語」と位置付けられ、人々は「母語」を通じて各種族の伝統文化や価値観を継承、保持するとともに、中立的言語である英語を共通語として意思疎通を図り、国民として一体感を高めるよう期待される。この2言語主義は、「母語」を文化的言語、英語を実用的言語と位置付け、機能の異なる2言語を習得させる点で独特なものである。

シンガポールの公用語4言語に関して、対応種族、言語の機能、アイデンティティとの関わり等の点で捉えると表1のとおり整理することができる。

表1 シンガポールの公用語の分類

公用語機能等	英語	華語	マレー語	タミール語
位置付け	共通語	母語	母語/国語	母語
対応種族	-	華人	マレー系	インド系
機能区分	実用的	文化的	文化的	文化的
アイデンティティとの関わり	ナショナル(仮説)	エスニック	エスニック	エスニック

現在、公用語4言語は平等とされているが、その制度化が行われた1950年代後半まで、4言語の扱いには相違があった。まず英語が、次いでマレー語が、いずれも共通語や国語としての位置付けで重視され、シンガポールの独立後、特に1970年代以降は英語と「母語」を等しく重視する方針で2言語主義の強化が進められた。以下、言語政策の変遷を概観したい。

シンガポールでは、植民地政府の英語重視政策の下、早くから言語面で人々の英語化が進んでいた。1947年、「教育10カ年計画」において非英語校³で小学3年生から英語を必修科目とする方針が示され（Ministry of Education 6）、「事実上英語を共通語とする国民統合政策」（田中 106-7）で英語化が加速した。植民地体制下で社会的上昇を図るため、人々が英語重視の方針に追随したことは想像に難くない。

しかし、華人社会から華語教育重視を求める声が

高まり、1953年には華語による高等教育機関「南洋大学」設立運動が開始される（太田 1998 34）など、植民地政府の英語重視政策は見直しを迫られることになった。シンガポールに部分的内政自治権が付与された1955年、全党派代表9名による特別委員会（All-Party Committee）が立法院内に設置され、華語教育問題の検討が進められた。1956年に発表された同委員会の報告書では、既述の4種類の教育用語別の学校を平等に扱うこと、英語を第一、マレー語を第二、華語あるいはタミール語を第三の必修言語とすること、初等教育段階で2言語教育、中等教育段階で3言語教育を行うこと等が勧告された。同報告を受け、4言語を平等に扱う原則が1957年の教育法で具体化され、また、完全内政自治への移行を定めた1958年憲法で、立法院の使用言語が従来の英語のみから4言語へと拡大された（田中 112）。

マレー語を含む3言語主義が標榜された理由は、シンガポールではマラヤ連邦との合併が志向されていたためである。マラヤ連邦では、1957年の独立に伴ってマレー語が国語に定められ、英語を10年間の期限つきで第二公用語にする旨が公布された（太田 1998 232）。マレー語重視は、マラヤ連邦との合併による植民地体制からの脱却を目指すシンガポールにとって、余儀ない選択であった。1959年、完全内政自治の実施とともにLee Kuan Yewの率いる人民行動党（the People's Action Party: PAP）が政権に就くと、同政権はマレー語重視の言語政策を推進した。

Abdullahらは、シンガポールの多様な人々に共通のアイデンティティを持たせ相互理解を促すための統合的な役割がマレー語に求められた旨を指摘し、具体的取り組みを明らかにしている（180-81）。それによれば、マレー語を教育用語とする中等教育機関の設立、行政機関におけるマレー語の使用促進、全ての学校系統における国語（マレー語）教育の義務化（週2回、各30分）等の取り組みが進められた。そのため、マレー語の教師や教材の需要が「一時的に」高まったという。

マレー語重視が持続しなかった理由は、1963年に合併が実現したが僅か2年間で「追放」される形でシンガポールがマレーシアから分離、独立したためである。⁴マレー語重視の最大の理由が消滅したこ

とで言語政策は見直しを迫られ、「公式に宣言されることとはなかったが、事実上の政策は、3言語教育から2言語教育へ、マレー語重視から英語重視へと転換された」(田中 114)。本節冒頭で述べた、4言語のうち英語と各種族の「母語」1言語を習得させる2言語主義へと、軌道修正が行われたのである。

3言語主義は政治的理由から標榜されたものであり、人々の学習負担の重さを勘案すれば、必ずしも現実的なものではなかったと考えられる。⁵ 全党派特別委員会の報告書では、単に読み書きできる程度の水準であればマレー語の習得はあまり困難でない旨の見解が示されているが (All-Party Committee on Chinese Education 10)、後述するとおり本来の母語が上記の4言語と異なる場合が多かったため、3言語主義の推進は実際には困難であったと考えられる。

1965年の独立後、それまでマレー語が担うこととされていた「多様な人々に共通のアイデンティティを持たせ相互理解を促すための統合的な役割」を、英語が担うこととなり、英語重視の形で2言語主義が推進されていった。独立当時、周辺諸国と非友好的関係にあったシンガポールでは、国家の存続自体が喫緊の課題であり、⁶ 生き残りに直結する経済面の実用性という点で、英語が特に重視されたと考えられる。貿易や外資導入の促進、先進国の科学・技術や知識の習得に有利な英語は、資源に乏しい小規模の都市国家の生存に不可欠なものであった。

また、国家の存続を模索する上で、政治的安定の確保が前提条件であったと考えられる。従ってまず国内において、人種・種族や言語を異にする集団に一体感を持って団結させる必要があり、意思疎通のための共通語が必要であった。しかもそれは、集団間の対立を招かない中立的な言語でなければならなかった。そうした社会的要請に応える要件を、公用語の中で英語が最も満たしていたと考えられる。

PAP政権の取り組みに呼応したマレー語学習熱の一時的な高まりはあったものの、人々の英語志向は着実に進行していた。例えば、シンガポールが完全内政自治に移行した1959年から、2言語主義の強化の必要性が提唱されていた1970年代末頃までの間の、初等教育における英語校と華語校の入学者数の推移は、表2のとおりとなっている。⁷ 多数派であ

る華人が「母語」でなく英語を教育用語とする学校へシフトしていったことが窺われる。

表2 初等教育における英語校と華語校の入学者数

学校系統 年	英語校	華語校	華語校 の割合
1959年	28,113人	27,223人	45.9%
1965年	36,269人	17,735人	30.0%
1971年	37,505人	15,731人	29.0%
1978年	41,995人	5,289人	11.2%

以上のとおり、英語の普及は着実に進んでいたが、それが共通語としての機能を実際どの程度果たしていたか、他言語との比較を通して見てみたい。

表3 各種族別的主要言語運用能力 (15歳以上)

主要言語 種族	年	マレー語	英語	華語	タミール語	福建語
マレー系	1957年	99.4%	23.5%	N. A.	N. A.	N. A.
	1972年	100.0%	60.1%	1.7%	1.7%	6.2%
	1978年	100.0%	84.2%	3.0%	1.3%	15.8%
華人	1957年	32.5%	18.0%	26.7%	N. A.	N. A.
	1972年	45.8%	41.2%	69.5%	0.1%	91.1%
	1978年	58.1%	56.1%	82.1%	0.2%	97.0%
インド系	1957年	88.3%	35.5%	N. A.	76.7%	N. A.
	1972年	95.9%	66.3%	0.1%以下	86.7%	5.1%
	1978年	97.4%	67.0%	1.7%	79.1%	8.7%
合計	1957年	48.0%	22.2%	19.9%	8.2%	N. A.
	1972年	57.1%	46.6%	54.4%	6.7%	72.7%
	1978年	67.3%	61.7%	63.9%	6.0%	77.9%

表3は15歳以上の各種族別的主要言語運用能力(「話せる」または「理解できる」割合)を示している。⁸ 4言語の平等化(1957年)の影響がほぼすべての調査対象に及んでいたと考えられる、1978年の数値を見てみると、人々に最も理解される言語は主要4言語ではなく福建語である。ただし、これを用いる者の大多数は華人であり、福建語は種族間の共通語としては有用度が高くないと言える。また、華人の場合は華語より福建語の有用度が高く、華語が「母語」の地位になかったことが窺われる。福建語に次いで理解されるのはマレー語であり、各種族ともに英語より理解される割合が高いことから、種族間の共通語として最も有用度が高い。また、マレー語は華語やタミール語と異なって「母語」の地位に

唯一達している。英語は有用度の点で福建語やマレー語に及ばないが、種族間で理解する割合の差が少なく、共通語として正統性があると言える。⁹

2言語主義が必ずしも有効に進んでいないと指摘され、後述のとおり「母語」を巡る取り組みが1979年に開始されることとなったのだが、シンガポールの共通語に関する当時の状況は以上のようなものであった。共通語として最も有用度が高かったマレー語は、実際には種族間の交易等の必要から歴史的に形成された“Bazaar Malay”という一種のピジン語

(Kuo 1985 3)が用いられることが少なくなかったと考えられる。英語に関する状況にも、これと類似したものがあった可能性がある。

Lee Kuan Yewは1978年、大衆の間で非常に奇妙なシンガポール型ピジン英語、シンガポール訛りの英語が話されるようになっていると指摘し、それは理想的ではないが当面は最善なもので、努力次第で改善可能との見解を示している (Lee 1978 12-13)。

当時、2言語主義の非効率さが問題視され、児童の学習負担の重さが主要な要因の一つと指摘されていた。例えば華人の場合、表3で示したとおり華語よりも福建語が普及していたことから、2言語主義（英語および華語の2言語）が実際は3言語主義を意味することとなり、負担が大きいと考えられた。既述のとおり、「母語」の地位にあると言えるのはマレー語のみという状況であったため、「母語」教育の強化が提唱された。一方、英語を巡る状況にも上記のとおり為政者に懸念を抱かせるものがあった。

そのため、まず、多数派である華人の「母語」を普及し福建語等の方言の抑制を図る政策が、1979年にLee Kuan Yewの音頭で開始された。英語に関する取り組みも、既述の南洋大学や非英語校を巡る改革等を通して進められたが、¹⁰ 政府主導のキャンペーン的な政策が展開されたのは、冒頭で言及した英語改善運動が開始された2000年以降のことであった。

3.シンガポールの英語および関連の言語政策

2000年4月、Goh Chok Tong首相（当時）の音頭で英語改善運動が開始された。これは、冒頭で述べた“Singlish”と呼ばれるシンガポール型ピジン英語の使用を抑制し、「正しい英語」の普及を図るため

の取り組みであり、現在も継続されている同国の代表的言語政策の一つである。シンガポール型ピジン英語に対する懸念は、既述のとおり1978年にLee Kuan Yewが示しており、海外からの英語教師の招聘やマスメディアを通じた啓蒙活動等、ピジン英語改善の試みが1980年代初頭に開始されていたが (McCrumb, Cran & MacNeil 338)、首相が自ら主導し長期間に亘り取り組んでいる点で、英語改善運動は以前の政策と様相を異にしている。

“Speak Well. Be Understood.”という同運動の当初のスローガンは、世界に理解される言語を話す必要があるという、為政者の問題意識を窺わせる。運動の対象は40才以下の国民とされ、学校や公共施設での「良い英語」に関するセミナーや討論、劇の開催、インターネットを通じた運動の情報提供、手引書の出版等、様々な試みが進められた。また、関連する動きとして、初等・中等教育用英語シラバスの改訂、初等・中等教育の英語教師のレベル向上を図る再訓練等、教育省による施策が同運動の開始前から公表されていた (The Straits Times, 29 October 1999)。

運動開始の前年、“Singlish”に対する為政者の見解が複数示されていた。Lee Kuan Yewは1999年8月、アジア経済危機からの回復と一層の経済成長を図る上で英語が重要となるが、“Singlish”は文法や構文等の特殊性から外国人に理解され難いため問題である旨を述べている (Lee 1999 8-10)。彼は、世界には多様な英語の変種が存在することを認めつつ、教育を受けた者は英語の複数の変種を使い分けられるが、そうでない者は“Singlish”的習得に終始してしまう恐れがあり、不利を被るとの考えを示している。

Leeに続いてGoh Chok Tongは、“Singlish”を使用していてはグローバル化に対応できず、一流経済国にはなれないと述べ、改善の必要性を主張した (The Straits Times, 23 August 1999)。彼はまた、“Singlish”を使い続けると外国人には理解不能な独特のピジン英語しか話せなくなる恐れがあり、既にその道程の半ばにあるとの懸念を示している。

為政者が問題視したシンガポールの独特のピジン英語については、1978年のLee Kuan Yewの指摘に先立ち、後述のR. K. Tongueがその存在を明らかに

していた。また、既述のとおりその改善の取り組みが進められていた 1980 年代半ばには、本名によれば、このピジン英語の特徴がシンガポールの主要英字紙で以下のとおり紹介されていた（33）。

生徒たちは 60%が英語、20%が北京語、さらに 20%が福建語の不思議な混合言語をよく使う。文法は、英語でも中国語でもない。彼らはそれを実に上手に操る。およそ 10 語も話すと、だいたい混合物が混じる。（*The Straits Times*, 16 January 1985）

既述のとおり、人々に最も理解される言語が 1970 年代末頃では福建語であったことから、その影響がこのピジン英語に及んでいたものと考えられる。

Lee が「非常に奇妙なシンガポール型ピジン英語」と指摘したこの言語が、いつ頃から“Singlish”という名称で呼ばれるようになったか判然としないが、Lee の指摘（1978 年）の 10 年後には、シンガポール型ピジン英語に関するステレオタイプ的な表現として“Singlish”という呼称が用いられている旨を、Kuo が指摘している（Kuo 1988 2）。また、Kuo の指摘の 5 年後である 1993 年に、シンガポールのテレビ局が自国で制作した英語の娯楽番組の放映を開始した際、番組で用いられていた“Singlish”の是非を巡る議論が起こっている（Ho and Alsagoff 281）。メディアの影響力は大きいため、Goh も 1999 年の上記の発言にあわせて、“Singlish”を話す主人公が人気を集めているテレビ番組に批判的に言及している。

為政者に懸念を抱かせ政府主導の改善運動に着手させるに至った“Singlish”とは、具体的にどのようなものなのか。やや長くなるが英語改善運動の手引書の例文を引用し、その特徴を明らかにしてみたい。

例文 1

“Singlish”: My family at first don’t know where to go one. So, think think think.

標準英語: At first, my family didn’t know where to go. So, they kept on thinking about it.

例文 2

“Singlish”: All like my idea, but in the end *kena* take

coach, father say cannot drive so far away.

標準英語: Everyone liked my idea, but in the end, we had to take a coach, because my father said it was too far away to drive.

（出所：Speak Good English Movement Committee.）

例文 1 では、標準英語からの時制を始めとする文法的逸脱が見られる。強調の意味を表すため動詞や形容詞を反復するのも “Singlish” の特徴といわれる。例文 2 では、そうした逸脱に加えて、“kena” というマレー語からの借用語の使用が見られる。¹¹ マレー語等の「母語」の干渉も、後述するとおり “Singlish” の主な特徴の一つである。こうした例文を見る限り、「文法や構文等の特殊性から外国人に理解され難い」との Lee の上記の見解は的を射たものと考えられる。

しかし、シンガポールで話されている英語が上記のようなものばかりでないことは言を俟たない。Lee 自身、世界には多様な英語の変種が存在することを既述のとおり認めているが、シンガポールにも複数の英語の変種が存在することが明らかにされている。“Singlish” を底辺とする同国の英語は一般に三層の構造を成すものとされており、その体系化のモデルとして Pakir は以下の分類を提示している（81）。

- ①同国型標準英語：国際的に会話、筆記の両方で使用される、高い位置付けのもの。
- ②同国訛の英語：国家内の意思疎通で主に会話で使用される、統合的な役割を持つもの。
- ③同国化した英語：土着化された、俗語的に会話のみで使用される低い位置付けのもの。

上記の分類は上位語 (acrolect)、中位語 (mesolect)、下位語 (basilect) から成る言語変異の連続体という Platt らの分類（8）に対応するものと考えられる。英国の英語を基準とするフォーマルさという点では①を頂点として③が最も低く、土着化の度合いでは逆に③から①の順となる。“Singlish” は③に該当するものと考えられている。

また、既述の Tongue はマレーシアとシンガポールの英語に関する先駆的研究を行っており、複数の変

種が存在すること、「母語」の干渉が認められること、動詞の活用や時制の変化が簡素化または省略される傾向があること等を特徴として挙げている（114）。変種の中で最も下位に分類されるものは特に「母語」の影響が強い旨を、Tongue はあわせて指摘している。そのような特徴は、既述の例文に見ることができる。

シンガポールでは複数の英語の変種が用いられ、状況に応じて上位語や下位語が使い分けられていると考えられる。Tongue は、ネイティブスピーカーに近い水準の英語を話していた人が、突然下位の変種に切り替えるのを目の当たりにすることは日常的で、その変化が非常に劇的である旨を指摘している（11）。すなわち、言語のコード切り替えという現象が普通に見られる環境が同国にはあるものと考えられる。Tongue によれば、コード切り替えに伴い文法、語彙、声の質、発声のペース、身振りさえも異なり、下位の変種は「親密さの合図」として使われるという。

しかし、教育を受けた者は変種の使い分けが可能だが、そうでない者は下位の変種の習得に終始してしまうと、シンガポールの為政者は危惧していた。そのため、下位の変種の使用を抑制すべきとの発想に結びつき、英語改善運動が開始されたと考えられる。こうした発想の是非については後に考察を試みるが、シンガポール人の英語運用能力は必ずしも低くないと考えられることを、ここでは指摘しておきたい。例えば、英語改善運動が開始された 2000 年頃に実施された TOEFL テストの結果では、シンガポールの平均点は 252 であり、欧州を含む各国の中でトップクラスの高い数値となっている。¹²

なお、「Singlish」の是非を巡る議論については次節で考察するが、その文法に関して目を配っておきたい。Ho らは、言語学的見地からは「正しい」言語であるか否かの問い合わせ意味をなさないとして、「Singlish」に一定の文法があること、話者がそれを認識していること等を指摘している。例えば、以下の例文に関して、「Singlish」の話者はこれと異なる語順（She と kena を入れ替える等）は文法的でないとの見解を一様に示しているという（285）。

“Singlish”: She kena sabo by them.

標準英語: She was sabotaged by them.

もちろん、上記の “Singlish” の例文が外国人に理解できるものでないことは自明であるが、このような言葉は Tongue が指摘しているように「親密さの合図」として仲間内のインフォーマルな会話で用いられるものであり、一種のクレオールとして話者の「母語」となっていない限りは、外国人に向けて発せられることはないと考えるのが妥当であろう。

4. “Singlish”を巡る議論

既述のとおり、1993 年にテレビ番組での “Singlish” 使用の是非を巡る議論が起こったが、Ho らによれば、マスメディアの影響、特に子供に及ぼす影響が懸念され、視聴者の多くは否定的な見解を示したという（281）。このような議論は現在でも行われているが、シンガポール型ピジン英語に対する国民の見解は一様でなく、肯定的に捉える向きも少なくない。否定派、肯定派の主張を通して、“Singlish” を巡る議論の争点を明らかにしたい。

1999 年 6 月、再びテレビ番組（上記と別の番組）での “Singlish” 使用の是非を巡る議論が起こり、同国での英語に関する有識者の対談が行われた（*The Straits Times*, 25 June 1999）。同対談では、「言語は思考・分析・知識習得等の道具であり、こうした目的に適わない言語は問題だ」、「標準」英語の定義が問題だが、実用的見地からは「標準」から大きく逸脱すべきでない」等、実用主義的観点から “Singlish” を否定的に捉える見解が示されている。その一方、「何を規範とするか決めれば “Singlish” の占める位置も見出せる」、「シンガポールの英語は文化的アイデンティティを示す重要な手段だ。英語の実用的側面を考える際もこの観点を失うべきでない」等、“Singlish” に一定の理解を示す向きもあった。

“Singlish”に関しては、実用主義的観点から問題視する立場と、シンガポール国民が一体感や帰属意識を確認する手段であるとして肯定する立場に、概ね分かれている観がある。“Singlish”を始め英語を巡るシンガポール人の態度に二分的なものがあると考えられるが、このような態度は Lee Kuan Yew が同国型ピジン英語に懸念を示した 1978 年当時に既に確認されていた。¹³ 表 4 は、英語の様々なタイプ（変種）に対するシンガポール人の見方を示しており、自国

で教育のある者が話していると考えられるタイプ、自分が習得すべきと考えるタイプのいずれも、「英国型」と「自国型・自国流」が拮抗しており、英語に対する二分的な態度が現れていることがわかる。

表4 英語の様々なタイプ（変種）に対する見方

英語のタイプ 態度	英国型	米国型	豪州型	自国型 自国流	その他
自国で教育のある者 が話す英語のタイプ	40.5%	6.0%	0.6%	42.3%	10.6%
自分が習得すべきと 考える英語のタイプ	38.3%	14.4%	0.6%	38.9%	7.8%

（出所：Shaw 119-20 より作成。）

また、上記の調査の約20年後に、英語改善運動の開始にあわせてシンガポール政府が国民の口語英語の水準等に関する調査を行った。¹⁴ それによれば、「会社では良い英語を話す：68%」、「仲間といふ時は“Singlish”に切り替える：79%」等の回答があり、状況に応じて人々が英語の複数の変種を使い分けていることが窺われる。このような言語のコード切り替えは珍しくないことをTongueが指摘していたが、上記の調査結果からその状況が具体的に理解できる。このような言語のコード切り替えは、多言語話者の意思疎通の戦略であるとの見方もある（Pakir 76）。

なお、言語のコード切り替えのほか、コード混合（同一の文中における語彙レベルの混合）の現象もシンガポールでは一般的に見られると考えられる。Xuらは、華人社会における言語態度等に関する調査の結果、「華語を話す際に他言語の言葉を混ぜるか」との問い合わせに76%（885人中、667人）が肯定的回答を行ったことを明らかにしている（142）。この調査結果は華語を話す際のコード混合に関するものではあるが、同国ではこうした現象が一般的であることを示しており、英語を話す際の言語態度にも影響を及ぼしている可能性があると考えられる。

このような言語態度を理解する上で、“Singlish”を含む英語の複数の変種が形成された必然性について考察したい。Tongueは、マレーシアやシンガポールでは植民地体制からの脱却後、英語の標準を8,000マイルも離れた英国の標準に合わせることを求める圧力が弱まった旨を述べている（4）。この見解は、

上記（表4）調査結果からも妥当なものと思われる。母語としない人々も簡便に用いることができるよう、下位の変種が生み出されたことは想像に難くない。

既述のとおり、1970年代末頃までシンガポールで人々に最も理解される言語は福建語であり、共通語として最も有用度が高い言語はマレー語であった。こうした状況で、福建語やマレー語の語彙や語法を取り入れたピジン英語が形成されたのは自然なことであったと思われる。Tongueは「ピジン化した英語は明らかに容認できないし、単に間違いと呼ばれるべきもの」（12）との考えを示しながら、下位の変種は「それを使う人々のための意思疎通の手段として完璧に機能している」（111）と認めている。また、唐須は、意思疎通の手段として普及するに伴い英語という言語自体の「脱民族化・脱英米化」が起こるとの見解を示している（200）。既述の“Bazaar Malay”が形成されたのと同様に、生活の必要から脱英米化した英語として“Singlish”が生み出されたと考えられる。

本名は、アジア諸国で英語教育の普及に伴い国民同士が頻繁に英語を使うようになると、その人々の使いやすい特有の英語が発達する旨を述べている（31）。あわせて、本名はこの現象を的確に把握する概念として機能と構造の相互関係をあげて、「英語の社会的機能が変種構造を決定し、そして構造が機能を強化する」との見解を示し、シンガポールの例をあげて特有の英語が発達する必然性を論じている。

このような“Singlish”形成の必然性や意思疎通上の機能を勘案すれば、「ピジン化した英語は明らかに容認できない」と断言できるか、議論の余地があると思われる。“Singlish”は単に意味が通じるだけではなく、微妙な意味合いを的確に伝えるための機能を有しているとの捉え方があり、例えば、あるホームページに次のような主張が掲載されている。¹⁵

Take for example the phrase “he is very one kind one.” It is almost impossible to capture the essence of this phrase in Standard English, without compromising its succinctness... there is no other language that can encapsulate as much meaning in our context.

上記の例文（斜体部分）は“Singlish”の話者でなければ理解が難しいが、標準英語を始めとする他のいかなる言語でも的確に言い表せないものを“Singlish”では表現できる、との見解が示されている。つまり、上位語（標準英語）にはない機能を下位語（“Singlish”）が有しているとの主張である。“Singlish”がそのような機能を持つものであれば、Tongue が述べたように「単に間違いと呼ばれるべきもの」と断じることは妥当でないと言えるだろう。

標準とは異なる変種に固有の価値を認める見解があることは、Tongue 自身認めており、シンガポールの国連大使（当時）T. T. B. Koh の談を紹介している。

リトマス試験のようなものだが、海外において誰かが（英語を）話しているのを耳にすれば、その人がシンガポールやマレーシアの人だとすぐにわかる。自分が海外で（英語を）話す場合も、同胞にすぐに自分がシンガポール人だと気づいてほしい（7-8）。

必ずしも英語の下位の変種に関して述べたものではないかもしれないが、Koh は標準英語とは異なる言葉が同胞意識や連帯感を感じさせるものであるとして、それを肯定的に評価している。外交官として Koh は恐らく標準英語の運用能力を持っていたものと考えられるが、上記の言葉には標準と異なる変種を敢えて用いる意思が示されているように思われる。

既述のとおり、言語態度に関する調査で「仲間」といる時は“Singlish”に切り替える」と回答した割合が約 80% の高率に達していることは、標準英語で言い表せない意味合いを“Singlish”では伝えられるとの見解や、標準と異なる独自の英語でシンガポール人としての同胞意識や連帯感が感じられるとする考え方方が、広範な人々に共有されていることを窺わせる。

本名は、シンガポールのある新聞の社説が国民の共感を呼んだとして、その内容を紹介している（38）。

シングリッシュは、当地で自然に発生した、気持ちを和ませる心地よいことばである。それはシンガポール人が自分を英語で表現する方法なのである。一言でいえば、それは街のことばである。それは、

シンガポール人だけのことばであり、シンガポール人の共通のことばなのである。（原典：The New Paper, 15 August 1988. 下線は引用者による。）

国民に同胞意識や連帯感を感じさせる、固有かつ共通の言語が、ナショナル・アイデンティティに関わることはあることは明らかであると考えられる。Pakir は、かつて実用的または手段としての価値しか持たなかつた言語であるが、英語はシンガポール人の文化的・国民的アイデンティティを表現するための重要性をあわせ持つようになった旨を述べている（82）。これまでの考察から、Pakir の見解が妥当なものであることは論を俟たないと思われる。

5. 言語観を巡る問題

シンガポールにおける英語の公的な位置づけは、表 1 に示したとおりあくまでも実用的言語であるが、既述のとおり人々のナショナル・アイデンティティとの関わりを考慮すれば、英語は「母語」と同様に文化的言語としての性格をあわせ持つ言語であると考えられる。また、このことから、言語を静態的・固定的に捉えて機能区分するアプローチには議論の余地があると考えられる。この点について、「母語」とされる華語を事例として考察してみたい。

華人の方言（福建語等）使用を抑制し「母語」の普及を図る政策が 1979 年に開始されたことは既述のとおりだが、同政策を推進した Lee Kuan Yew が、その 30 周年記念式典における演説で華語の重要性に関する見解を示している。¹⁶ その中で彼は、経済成長を続ける中国の市場価値を理解した親や生徒が華語普及に異論を唱えなくなっている旨の見解を、中国からシンガポールへの新たな移民の流れがあることを踏まえながら示している。かつて専ら文化的言語と位置づけられた華語は、今では経済的価値を持つ実用的言語としても重視されている状況である。

また、華語と同様に「母語」とされるマレー語が、ピジン化した形であり、以前は共通語として機能していたことは既述のとおりである。政治的理由もあり、象徴としての国語として、また、マレー系の「母語」として位置づけがその後変化したものの、マレー語が共通語としての有用度が高い実用的言語の性

格を持つものであったことは事実である。

こうした点を勘案すれば、言語に対する静態的・固定的なアプローチは必ずしも妥当なものでないと考えられる。Lee は、2 言語主義の強化を唱えていた 1970 年代に「言語は、それを話し、使う人たちの生活のなかで生きているもの」であると述べている。¹⁷ この言葉は、華語を日常生活で使うように奨励する文脈で発言されたものではあるが、言語の動態的な性質を認識したものであるように思われる。「母語」の位置づけが可変的なものであることを自ら認めていたり、言語を静態的・固定的に捉える発想は議論の余地があるものであると言えるだろう。

言語のあり方は固定的であり得ないことを認識し、動態的に捉えることが現実的であると考えられる。実際、世界には英語の多様な変種が存在することを Lee も認識していたし、マレー語にも既述のとおり ピジン化した“Bazaar Malay”と呼ばれる変種があるように、言語の態様は決して一様ではない。様々な変種が各々の機能を担っている事実を勘案すれば、その優劣を論じることは妥当でないと思われる。

シンガポールの言語政策には、様々な言語の間に優劣を置く傾向があると考えられる。中国系方言を抑制し華語の普及を図る既述の政策や、“Singlish”を抑制し標準英語の使用を奨励する英語改善運動は、いずれも標準語や上位語を重視する政策と言える。Kuo の分類によれば、シンガポールの主要な言語は権威の高い言語と低い言語に大別され、前者として英語と華語が、後者として“Bazaar Malay”や 福建語等の諸方言が位置づけられている (1976 12)。後者は専ら国内の意思疎通の言語として用いられ、また、教育を受けた者が用いる割合は少ないと考えられ、権威の低い言語と見なされている模様である。

しかし、為政者も認めたとおり「言語は、それを話し、使う人たちの生活のなかで生きているもの」であり、例えば福建語の場合、シンガポール華人の多くに本来の母語として用いられていた言語である。福建語を始めとする中国系方言に対し「義理の母語」と言える華語の使用を促すことは容易でなく、事実、華語普及の政策は 1979 年の開始以来一定の成果をあげてきたが、華人社会における華語の使用割合は 1980 年代末頃を頂点に、現在まで漸減傾向にある。

このような観点からも、方言や下位語は必ずしも抑制されるべきものではないと言えるだろう。実際、最近は中国系方言や“Singlish”をある程度容認する動きが見られるが、¹⁸ 基本的には標準語や上位語が重視される傾向に変化はない。その背景には、為政者の言語観や文化的特徴の影響があると考えられる。

華語普及の政策を考案、推進した Lee Kuan Yew や、英語改善運動を開始した Goh Chok Tong は、いずれも“Straits Chinese”と呼ばれる英語系華人¹⁹ である。Lee は「正統派」英語遣いの代表と目されているが、「正統派」英語遣いにとって“Singlish”は「耐え難い粗雑な言葉」であると言われる(太田 1994 69-70)。また、シンガポールでは「異国の祖先文化に憧れとひけめ」が感じられがちで、「権威ある文化とは「旧祖国」の文化、模範となる言語は「本家の書き言葉」と見なされる、との指摘もある(太田 1994 227)。中国系方言でなく華語が、“Singlish”でなく標準英語が重視されるのは、上記のような傾向が背景にあると考えれば必然的なものであることが理解できる。

ただし、為政者の言語観は必ずしも首尾一貫していない。例えば、Lee は 1972 年、ASEAN 諸国では英語を受け入れ独自に発展させてきたため、指導者たちは英米人のように「完璧な英語」を話すことはできないが、完璧に意思疎通できる旨を述べている(黄・呉(下巻) 11)。必ずしも標準英語を規範としない見解が早くから示されていたわけで、為政者の言語観に揺れがあるように見えるが、「完璧な英語」を唯一の規範としない考え方は妥当であり、現実的なものであると思われる。

既述のとおり、普及に伴って英語という言語自体の「脱民族化・脱英米化」が起こるとの見方があるが、妥当な見解であると言えるだろう。“Singlish”が英語として国際的に通用するか判然としないが、ピジン英語が母語話者に受け容れられた例もある。例えば、よく知られている“Long time no see.”という表現は、「好久不見；好 (very) 久 (long time) 不 (not) 見 (see)」という中国語が起源との説があり、口語英語の一種として母語話者にも認知されている。

もちろん、「ピジン化した英語は明らかに容認できないし、単に間違ないと呼ばれるべきもの」との見方も母語話者の中にあることは既述のとおりである。

しかし、標準英語で言い表せない意味合いを伝える機能をピジン英語が有し、国民のアイデンティティに関わる言語であると考えられることから、少なくともその価値は否定されるべきではないだろう。

言語とアイデンティティとの関わりについては、為政者も一定の認識を示している。華語普及政策の約20年間の取り組みを回顧して、Lee Kuan Yewは、言語に深い情緒的響きがある旨の見解を示している。成人後に福建語を学び直した際、幼少時に耳にした祖母や友人たちの言葉が蘇ってきたという (Promote Mandarin Council 34)。“Singlish”の場合も、話者に同様の思いを抱かせる面があるのではないだろうか。

しかし、“Singlish”を手放しで礼賛することは妥当ではない。上記の述懐とあわせて Lee は、「“Singlish”は言語学者には興味深いかもしれないが、地域社会には益するものがない」旨を述べており、(Promote Mandarin Council 36) 留意する必要があるだろう。太田は、経済規模が小さい社会で独自の言語開発は不経済となるため、言語面で「旧祖国」に依存することは独立国としての不見識ではなく、小国の宿命であるとの見方を示している (1994 227-28)。言語を巡る経済的力学というのも軽視できないのは事実であり、安易に批判することは避けるべきであろう。

太田は、あわせて、「公用語を自国用に標準化しない方針は、経済性を勘案して「本家」の言語を標準語とし、独自性の主張をしない文化的な選択だ」との見解を示している (1994 231)。言語が合理主義的な規定に馴染まないものであることが事実であれ、シンガポールにおける言語に対する固定的・静態的アプローチが修正されることは考え難いと思われる。それが「文化的な選択」であれば、正否を問うことは妥当ではない。しかし、正否の間に馴染まないということは、選択は複数あり得るということでもある。今後、シンガポールの人々がどのような方向を選択するのか、非常に注目される。

6. おわりに

本論文では、シンガポールの共通語、特に英語のあり方とナショナル・アイデンティティの関わりを巡る考察を試みた。同国の英語、とりわけピジン化した英語である“Singlish”は、同国の人々が同胞意

識や連帯感を確認でき、他の言語で言い表せない意味合いを伝えられる言語であり、ナショナル・アイデンティティに関わる言語であることが明らかになったと思われる。またその意味で、様々な変種から成る同国の英語は、実用的言語としてのみ規定し得るものではなく、文化的言語の性格をあわせ持つものであると考えられる。

為政者は、言語を巡る経済的力学を視野に入れ、自国の言語の規範を外部に見出す他律的な言語観を敢えて堅持しているように思われる。それに対して、自律的言語観の確立を安易に説くのは躊躇されるが、シンガポールというまだ若い国家が成熟するに伴い、為政者の言語観も変容し得ると考えるのは楽観的に過ぎるだろうか。

注 6 で触れた独立当時のシンガポールを取り巻く状況はその後変化し、同国は高い経済成長を遂げて国家としての生存を確保している。成長に伴い国民の構成も変化しており、2000 年代初頭には「新移民」の顕著な流入が報じられるようになった。「新移民」の流入は現在も続いているが、既述のとおり Lee Kuan Yew も言及しているが、その大半は中国とインドから来ており、同国の人口は過去 10 年間で 26% 増加している (日本経済新聞)。為政者はシンガポールが完全内政自治に移行した 1959 年、シンガポールには国家形成の要件の一つである「種族を越えた一体感」がなく、人々が共通の言語を持たず、共通の文化を創るための歴史的事件の共有もなかった旨を述べている (黄・呉 (下巻) 177)。この発言から半世紀経った現在も、同国の人々が「種族を越えた一体感」を抱いているとは必ずしも考えられない状況がある。

人々が意思疎通を図り同胞意識を醸成する上で、共通語が重要な役割を果たすことは明らかである。歴史は浅いが、シンガポール国民が共通かつ独自の文化をやがて創造することも確かに思われる。独自の文化の一つとして、“Singlish”の占める位置も見出される可能性があるものと考えられる。「新移民」の多くがこのピジン英語にシンガポール固有の響きを感じていることは、間違いないように思われる。

参考文献

- 黄彬華・呉俊剛編（田中恭子訳）『シンガポールの政治哲学 リー・クアンユー首相演説集』（上・下巻）井村文化事業社、1988年。
- 太田勇『国語を使わない国 シンガポールの言語環境』古今書院、1994年。
- 太田勇『華人社会研究の視点—マレーシア・シンガポールの社会地理』古今書院、1998年。
- 田中恭子『国家と移民』名古屋大学出版会、2002年。
- 唐須教光「言語と異文化共存」青木保ほか編『岩波講座文化人類学第8巻 異文化の共存』岩波書店、1997年。
- 日本経済新聞「外国人との共生 「移民の国」奮闘」、2010年11月28日付記事。
- 本名信行『アジアをつなぐ英語 英語の新しい国際的役割』アルク、1999年。
- Abdullah, Kamsiah and Bibi Jan Ayyub. "Malay Language Issues and Trends." S. Gopinathan et al., eds. *Language, Society and Education in Singapore: Issues and Trends*. Singapore: Times Academic Press, 1998.
- All-Party Committee on Chinese Education. *Report of the All-Party Committee of the Singapore Legislative Assembly on Chinese Education*. Singapore: Government Printing Office, 1956.
- Goh, Keng Swee and the Education Study Team. *Report on the Ministry of Education 1978*. Singapore: Ministry of Education, 1979.
- Ho, Chee Lick and Lubna Alsagoff. "Is Singlish Grammatical?: Two Notions of Grammaticality." S. Gopinathan et al., eds. *Language, Society and Education in Singapore: Issues and Trends*. Singapore: Times Academic Press, 1998.
- Kuo, Eddie C. Y. *A Sociolinguistic Profile of Singapore*. Singapore : Chopmen Enterprises, 1976.
- Kuo, Eddie C. Y. *A Quantitative Approach to the Study of Sociolinguistic Situations in Multilingual Societies*. Singapore: SEAMEO Regional Language Centre, 1985.
- Kuo, Eddie C. Y. and Bjorn H. Jernudd. *Language Management in a Multilingual State: the Case of Planning in Singapore*. Singapore: Dept. of Sociology, National University of Singapore, 1988.
- Lee, Kuan Yew et al. *Bilingualism in Our Society* [text of a discussion on TV on 6 April 1978]. Singapore: Ministry of Culture, 1978.
- Lee, Kuan Yew. *The Singapore Story: Memoirs of Lee Kuan Yew*. Singapore: Prentice Hall, 1998.
- Lee, Kuan Yew. "Stay Competitive with Foreign Talent." *Speeches* [a bimonthly selection of ministerial speeches]. 23.4 (Jul/Aug 1999): 7-12.
- Ministry of Education. *Education Policy in the Colony of Singapore: Ten Years' Programme Adopted in Advisory Council on 7th August, 1947*. Singapore: Government Printing Office, 1948.
- McCrum, Robert, William Cran & Robert Macneil. *The Story of English*. London: Faber and Faber, 1986.
- Pakir, Ann. "English in Singapore: the Codification of Competing Norms." S. Gopinathan et al., eds. *Language, Society and Education in Singapore: Issues and Trends*. Singapore: Times Academic Press, 1998.
- Platt, John, Heidi Weber & Ho Mian Lian. *The New Englishes*. London: Routledge and Kegan Paul.
- Promote Mandarin Council, ed. *Mandarin: the Chinese Connection*. Singapore: Ministry of Information and the Arts, 2000.
- Shaw, Willard D. "Asian Student Attitudes towards English." Larry E. Smith, ed. *English for Cross-Cultural Communication*. London: Macmillan, 1981.
- Speak Good English Movement Committee. *Speak Well. Be Understood*. Singapore: Ministry of Information and the Arts, 2000.
- Tongue, R. K. *The English of Singapore and Malaysia: ESM*. Singapore: Eastern UP, 1974.
- Xu, Daming, Chew Cheng Hai and Chen Songcen. "Language Use and Language Attitudes in the Singapore Chinese Community." S. Gopinathan et al., eds. *Language, Society and Education in Singapore: Issues and Trends*. Singapore: Times Academic Press, 1998.

注

¹ 原語では“Speak Good English Movement”だが、本論文ではこれを意訳して、英語改善運動とする。

² Goh Keng Swee and the Education Study Team 2-2. なお、同書の頁付は p.1-1, 1-2,... という方式である。

³ 独立以前のシンガポールの初等および中等教育は、英語、華語、マレー語、タミール語の4種類の教育用語別の学校系統に分立していた。

⁴ 1963年、マラヤ連邦とシンガポール、サラワク、サバ（旧英領北ボルネオ）が合併しマレーシア連邦を形成した。1965年の「追放」は、シンガポールのPAPが種族間に優劣を置かない立場で「マレーシア人のマレーシア」の実現を標榜し、マレーシア中央政府と対立したことが原因となった。

⁵ 全党派特別委員会の委員だったLee Kuan Yewは、同委員会の3言語主義勧告に関して、「現実的であろうとなかろうと、政治的に唯一擁護され得る政策は3言語主義であると考えていた」旨を述懐しており、実際にはその推進が容易でないことを認識していた（Lee 1998 216）。

⁶ マレーシアとは注4で述べたとおり種族や言語を巡って立場の相違があり、インドネシアは1963年のマレーシア連邦形成に対して主に領土問題を理由に「対決政策」を掲げて敵対していた。

⁷ 出所：Goh Keng Swee and the Education Study Team 1-1. なお、華語校の割合は4言語別の全学校系統に占める数値である。

⁸ 出所：Kuo 1976 6 および Kuo 1985 4に基づき作成。なお、1957年の数値は当該言語を「話せる」割合、1972年および1978年の数値は同じく「理解できる」割合を示しており、厳密には指標が異なる点に注意を要する。

⁹ 田中は、同統計の1978年の数値に関する分析を行い、英語は異なる種族間の共通語としては、「有用性ではマレー語に及ばないにしても、正統性ではマレー語をしのぐ」旨を指摘している（127）。

¹⁰ 同大学は、高等教育機関としての質が疑問視され、1975年に教育用語が華語から英語に切り替えられ、1980年にはシンガポール大学に吸収され消滅した。非英語校は、表2で示したとおり衰退傾向にあったことから、教育用語が1984年から1987年までの間に段階的に英語へ切り替えられることが、1983年に政府から通達されていた。

¹¹ “kena”は、自分ではどうしようもない不快な経験を表すために用いる、マレー語起源の借用語という。

¹² Educational Testing Service. “TOEFL test and score

data summary 2000-2001 edition.” *ETS Research: Policy Research Reports.* 2001. 22 Jan. 2011 <<http://www.ets.org/Media/Research/pdf/TOEFL-SUM-0001.pdf>>. 同資料では、1999年7月から2000年6月までの間の317,708人の受験結果が地域・国別に示されている。なお、国によって受験者数の差が大きい点に注意を要する（シンガポールの受験者は831人となっている）。

¹³ Shawは、シンガポール、インド、タイの3カ国の大学生825人を対象とする面接調査を行い、英語に対する態度を分析している（シンガポール人の回答者数は170名）。

¹⁴ *The Straits Times*, 1 May 2000. 調査対象は15歳～40歳の国民500人となっている。

¹⁵ “JobsCentral Community”という求職・求人関連のウェブサイトに掲載された投稿（“English vs Singlish.” *JobsCentral Community*. 16 May 2008. 22 Jan. 2011 <<http://community.jobscentral.com.sg/node/54>>.）。

匿名の投稿ではあるが、シンガポール国立図書館庁のホームページ内の“Singlish”関連ページでリンク設定の形で紹介されている。

¹⁶ Ministry of Information, Communications and the Arts. “Speech by Mr. Lee Kuan Yew, Minister Mentor, at Speak Mandarin Campaign’s 30th Anniversary Launch, 17 March 2009, 5:00 pm at the NTUC Auditorium.” *SG Press Centre*. 17 March 2009. 22 Jan. 2011 <http://www.news.gov.sg/public/sgpc/en/media_releases/agencies/mica/speech/S-20090317-1.html>.

¹⁷ 1974年5月29日の演説（黄・吳（下巻）44）。なお、同演説でLeeは、華語学習に経済的利益がないと考える親が少なくない旨をあわせて述べており、注16の演説でも触れている華語学習の経済的利益の問題を巡り、早くから発言していたことがわかる。

¹⁸ 例えば、2000年にGoh Chok Tong首相は、選挙の際に有権者にアピールするためにある程度の中国系方言を用いることは許容される、との見解を示している（Promote Mandarin Council 20）。また、注15のとおり、“Singlish”関連情報がシンガポール国立図書館庁のホームページに掲載されており、公的な場で一定の認知を得ていることが窺われる。

¹⁹ シンガポール華人は、母語または教育用語の点で華語系（中国系方言を含む）と英語系に大別される。“Straits Chinese”は文化変容の度合いの高い華人集団であり、英語系華人の一種と見なされる。

(Received:December 31,2010)
(Issued in internet Edition:February 8,2011)